

対人認知における類似性と非類似性について

門田 幸太郎*
平本 毅***

容姿や態度、能力や性格などの特性が他者と似ている度合いを類似性と呼ぶ。類似性に関する先行研究においては、類似性が対人魅力を増加させること、逆に非類似性が対人関係において相補的に機能することなどが報告されてきた。さらに、類似性 - 非類似性はすべての特性について同等の効果を持つものではなく、社会的望ましさや重要度の高さなどの要因が加わることによって差が生じる。本研究は、この差異を対人認知における自己認知と他者認知のプロセスで生じるものとして捉え、どのような要因がそのプロセスに影響を及ぼすのかということを経験紙調査によって探索することを目的とする。具体的には、被調査者の友人関係における(1)自己概念、(2)類似性 - 非類似性の理想、(3)類似性 - 非類似性の現実、を評定することによって、(1)と(3)の(自己認知と他者認知の)相互反映的なプロセスにおいて類似する - 非類似する特性についての重要度や感情価の差異が生じ、そのうえで(2)が欲求されることが検討される。結果として、パーソナリティにおける基本的志向性の重要度の高さ、被調査者の持つ自信の高さなどが類似性の認知/欲求と相関関係を持ち、対人認知に影響を及ぼすことが見出された。

キーワード：対人認知，類似性，非類似性，相補性

はじめに

環境や容姿、態度などが似ている度合いとしての類似性が、相手への好意などの対人認知に与える影響について、さまざまな研究がなされてきた。物理的環境の類似性を取り上げた研究者としてFestinger & Back(1950)やNewcomb(1961)を挙げることができる。Festinger & Backは既婚学生用アパートで物理的な類似性としての近さと好意度との関係を調査した。そ

の結果、部屋が近いなどの物理的条件と好意度との間に相関があることを見出した。また、Newcombは対人関係の成立過程を明らかにしようとして、入寮後の大学生を追跡調査した結果、対人関係が成立する初期の段階においては、近接要因が関与していたことを明らかにした。しかし、時間の経過とともに次第に考え方や価値観といった態度の類似性が対人関係の進展に大きく関与してくることも明らかになった。友人選択における容姿の類似性を指摘する研究はWalster(1966)の釣り合い(matching)仮説などにみられる。Walsterは376組の男女大学生が参加するダンス・パーティでアンケート結果

* 立命館大学産業社会学部教授

** 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

をコンピュータにかけてパートナーを決めた。結果は、学業成績・性格などほとんどのアンケート項目の類似性と好意度は無関連であったが、容姿の類似性の評価と好意度とは関連性が高いというものだった。態度の類似性については、Byrneの研究を中心に、態度の類似性と好意度との関連性を指摘する数多くの研究がなされてきた。Byrne（1961）は、他者による回答結果だとされた質問紙を被験者に配り、その回答者に対する好意度を尋ねた。ここで配られた解答用紙はまったく架空のものであった。回答者の態度が自分の態度に近いほどその回答者に対して被験者は好意的な評価をしていた。このように態度の類似性が好意をもたらす重要な要因であることを示す（likeness-leads-to-liking）研究が数多くなされた。Byrneの説明によると、類似性の欲求には、自己の態度の妥当性を保証することについてのイフェクタンス動機（effec-tance motive）が存在する。ある者の態度が他者と類似していると、その者の態度に妥当性付与（consensual validation）が行われることになるため、人は態度の類似した他者に魅力を感じるのである。このような類似性 - 魅力パラダイムに基づいた研究の中で、類似性とは、類似した態度項目の絶対数ではなく、その比率が重要であることも指摘されてきた（Kaplan & Anderson, 1973; Byrne & Nelson, 1965）。また類似点についても、表面的な類似よりも心理的な類似点の方が重要であるという指摘もなされてきた（Rokeach, 1968; Insko, Nacoste, & Moe, 1983）。類似特性そのものよりも、特性のもつ社会的望ましさ（social desirability）が対人魅力を決定するというその重要性を指摘する研究もある（McLaughlin, 1970; Stalling, 1970; Tesser, 1969）。蘭・小窪（1978）においては課

題達成次元では社会的望ましさの効果が、親和次元では類似性と社会的望ましさの両方の効果がみられた。さらに、被験者の自尊心と類似性の効果についても、自尊心の高い被験者の方が、低い被験者より類似性の効果が大きいという結果が得られた。奥田（2000）は態度の重要性が類似性と対人魅力の関係に及ぼす影響を検討し、重要性効果を見出した。重要性効果とは重要な態度の方が、重要でない態度よりも、類似や非類似のときに対人魅力に及ぼす効果が大きいという現象のことである。

このように、類似性が一般に対人関係を成立させる要因として重要な役割を果たしているということを指摘する研究は数多くなされてきた。これに対して、類似していることよりもむしろ、互いに異なっていることの方が、対人関係の要因として重要であるという主張がみられる。Winch（1958）は既婚カップルを対象として、支配要求の高い人に対して、同じく支配要求の高い人よりも、支配要求の低い人の方が、対人関係が成立しやすいと示した。この場合、同じ支配要求であっても、その高低の程度が異なる方が、相性がいい、つまり相補性が高いといえる。相補性のもう一つの型としては、養護したいという要求をもつ人と求護されたいという要求をもつ人がうまくいくというように、異なる要求によって双方の要求が充足されるという場合も考えられている。このような相補性をもたらす要求の組み合わせとして、支配要求と自立要求、求護要求と養護要求、顕示要求と恭順要求、攻撃要求と屈従要求、および責任要求と養護要求などが挙げられる（Wagner, 1975）。これまで類似性と相補性を対比的に捉える研究が行なわれてきた。結果としては、多くの場合、類似性を支持する結果が得られてきた。このこ

とから、相補性の概念を再検討し、相補性と類似性を対立的なものとするのではなく、相補性を類似性の一形態として解釈しようという考えもある(Seyfreid, 1977)。支配要求の高低という側面で見えた場合、その違いつまり非類似性が強調される。しかし、双方の要求が相互の要求充足をもたらすという意味で、双方が求める対人関係のタイプとしては、むしろ類似しているという見方も成り立つといえるのである。

Kiesler & Baral (1970) やWalster (1970) は自尊感情とデート相手の選択の関連性をとりあげて対立する結果を得ている。両者とも実験的に操作して自尊感情の高低を作った。その結果、前者では、自尊感情の高い人ほど魅力的な女性に、低い人ほどあまり魅力的でない女性に働きかけることが見出された。これによって、自己評価に見合った、つまり類似した相手を選ぶとする釣り合い仮説が支持された。ところが後者では、自尊感情とデート相手の選択における釣り合い仮説は支持されなかった。蘭(1986)はこれらの問題では自尊感情が実験的に操作された場合のみを扱っていたとして、「今後の課題としては、一般的な自尊感情の問題にしたときの効果について研究を進める必要がある」と指摘している。

以上のような類似性が対人魅力を作り出すという問題を一般化する場合の注意点として、Myers (1987) は次の4点を挙げている。まず、画一的な集団内で個人が埋没しそうな場合には、むしろ、個性的な人と親しくなる傾向がある。第二に、成績を競い合う場合のように、限られた報酬を求めようとする、類似性が人々を分かつ要因になる。第三に、類似性は問題の重要度と結びついている。重要な問題ほど類似性が求められる(Wetzel & Insko, 1982)。最後

に、類似性というのは相対的なものであり、ただ同じ国の出身というだけでも、留学生や旅行者の場合は類似性の要因になりうるとしている。

従来の類似性と対人認知の研究ではByrne (1971) による対人判断尺度、IJS (Interpersonal Judgment Scale) を用いた研究が多かった。これは、頭のよさ、時事問題の知識、道徳性、適応力のカムフラージュの4項目とともに、対象人物をどれくらい好きだと思うかという項目と、実験のパートナーとして、対象人物といっしょに仕事をしたいのかという項目の真の変数の2項目からなるものであった。この真の変数の2項目は相関が高かったため、その和をもって一元化され、対人魅力の測定値とされた。しかし、対人関係を包括的に捉える場合、たんに好意度だけではなく、具体的なものから抽象的なものまでさまざまな側面から捉える必要があると思われる。本研究では、どのような従属変数で類似性が現われ、またどのような従属変数で非類似性が現われるのかをさまざまな従属変数を用いて明らかにしようとした。

これまで、実験操作により類似性が操作されてきた。たとえば、被験者が「はい-いいえ」などの双極性の質問項目に「賛成」と答えた場合、「やや」「かなり」「非常に」などの程度の違いはあっても、同じ「はい」という極性をもつ側に反応している場合を類似性の項目とした。「はい」に対して「いいえ」という反対の極性をもつ側に反応している場合を非類似の項目とした。そして、全項目の中で類似性項目が占める割合が大きいもの(e.g. 75%)を類似条件とし、類似性項目が占める割合が小さいもの(e.g. 25%)を非類似条件としている。そこで、本研究では類似性を条件操作するのではなく、実態として、被調査者自身がそれをどう捉えて

いるかをみた。

類似性と対人認知としての好意度や魅力などとの関係を論じる場合、対象となる他者と類似しているのは現実の自己像か、それとも、理想の自己像かということが問題とされてきた。結果としては、対人認知に影響を与えるのは、対象と現実の自己像との類似性よりも、対象と理想の自己像との類似性の方が重要であるということが指摘されている（Wetzel & Insko, 1982；今川・岩淵, 1981）。本研究では、対象となる友人関係が現実の場合と理想の場合とで重要性効果を比較することを試みた。理想的な友人関係においては類似している方が望ましいが、現実的にはなかなか難しいので類似していてもいいということや、この点についてはどうしても譲れないので類似していないと困るということがあるのではないかと考えた。すなわち、次の二つの点を検討した。第一に、理想的な友人関係においては類似性を示す項目が多く、現実的な友人関係においては類似性を示す項目が少ない。第二に、本人にとって重要度の高い項目では、類似性がみられ、重要度の低い項目では、非類似性がみられる。

類似性 - 非類似性に影響を与えるもう一つの変数として、本研究では被調査者の自己概念を導入する。類似性 - 非類似性についての認知や重要性の判断は、他者に対する認知のみでは成立し得ない。自己の持つ特性についての自己概念を形成する段階が存在し、それをふまえたうえで他者を見ることによって初めて類似性やその重要度を知覚することができる。特に、先にみた自尊感情は、自己概念の中でも影響力の強い要因であると考えられる。自尊感情と類似性との関連性については二つの異なる予測がなりたつ。一つの予測は、自尊感情と類似性は比例

するというものである。自分に自信のある者は、自分を良しとしているので、他者にも同様の傾向、つまり類似性を求める。自信のない者は自分を良しとしないがゆえに、他者には自分と異なった側面を求める傾向が想定される。たとえば、運動能力に自信のない者は運動能力に優れた者を求めるということが予想される。また、社交的でありたいと思いつながりながらもそうなれない者は、社交的な者に憧れるということが考えられる。つまり、自信のある者は類似性を求め、自信のない者は類似性を求めないというものである。

これに対して、もう一つの予測は、自信のある者はさほど類似性を求めず、自信のない者は類似性を強く求めるというものである。自分に自信がある場合、他者からの支持をさほど求める必要がない。そのため、他者との類似性を求めることもない。また、自分の自信の妥当性を検討するためには、むしろ、自分と異なった者との接触を求めるということも考えられる。この場合、自信は類似性に影響しないかもしくは非類似性を求める傾向を高めると予想される。逆に、自信のない者にとっては、非類似者は自分を脅かす存在となり、これを避けようとし、自信の裏づけを与えてくれるような類似者を強く求めると考えられる。つまり、自信と類似性は反比例すると考えられる。本研究では、自信が類似性と他者認知との関連性に及ぼす影響について検討しようとした。

方法

調査対象者

関西地方の私立R大学学部生155名と大学院生3名、そしてR以外の他大学学部生10名の計

168名から質問紙を回収した。R大学,他大学ともに回答者の専攻の内訳は社会科学,人文科学領域の広い範囲にわたっていた。年齢は19歳から31歳まで(M = 20.23),性別は男性が53名,女性が115名となっている。

手続き

2003年5月に,調査協力者¹⁾とその友人・知人のネットワークを通じて質問紙を個別に手渡しで配布し,回収した。

質問項目の構成

質問紙は3群から構成され,それぞれ友人関係における(1)自己概念,(2)類似性-非類似性の理想,(3)類似性-非類似性の現実,を測定するようにデザインされている。

(1) 自己概念

第1群は,友人関係における自己概念について問う41の質問項目からなる。容姿,体力,成績,性格,人づきあいなどの項目について,「自分の~に自信がある」,「自分は~だと思う」といった形式の質問を行った。これに対して回答者は,「思わない」(1点)から「思う」(5点)までの5件法で評価した。

この群で測定されるのは,大学生の自己概念である。特に,類似性-非類似性と自尊感情との関係を調査するために,自尊感情を評価する項目が多く含まれている。類似性-非類似性の対人認知の第一歩としての自己認知を検討するのが目的である。

(2) 類似性と非類似性の理想

第2群は,友人関係における類似性-非類似性の理想について評定する17の質問項目からなる。(1)と同様の容姿,体力,成績,性格,人づきあいなどの項目について,回答者にとって

の理想の友人を思い浮かべてもらったうえで「あなた自身はその理想の友人と各項目についてどれくらい似ていると思いますか」という形式の質問を行った。これに対して回答者は,「似ていない」(1点)から「似ている」(5点)までの5件法で評価した。

この群で測定されるのは,大学生が理想の友人に望む自己との類似性-非類似性の程度である。つまり,類似性-魅力パラダイムに沿った先行研究で主に対象とされてきたような,初見の相手についての魅力判断,配偶者や友人の選択などにおける魅力判断といった類似性-非類似性についての欲求が測定される。なお,本研究では,先行研究の中で議論されてきた類似性-非類似性を知覚する対象としての態度(意見)・性格特性・能力・一般特性の諸側面を統合的に捉えるために,それぞれに対応した項目(例えば態度なら「課題に対する取り組み方は?」,性格特性なら「性格は?」,能力なら「能力や特技は?」,一般特性なら「服装は?」)を用意した。ただし,これらの側面間の比較を行うことが目的ではないので,均等に配置したり重み付けを行ったりする等の処置は施していない。

(3) 類似性と非類似性の現実

第3群は,友人関係における類似性-非類似性の現実について評定する17の質問項目からなる。(1)(2)と同様に容姿,体力,成績,性格,人づきあいなどの項目について,回答者にとって今現在一番仲の良い友人を思い浮かべてもらったうえで「あなた自身はその友人と各項目についてどれくらい似ていると思いますか」という形式の質問を行った。これに対して回答者は,「似ていない」(1点)から「似ている」(5点)までの5件法で評価した。現実の友人

表1
自己概念に関する因子分析結果

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
SC 周りからの自分に対する評判は良い。	.77	.02	.08	-.03
SC 他の人から尊敬されるような人間になるだろうと思う。	.74	.07	-.07	-.02
SC 自分の性格は悪くない。	.70	-.24	.09	.14
SC 人とうまくつきあっている方である。	.68	-.09	.17	.04
SC 自分の容姿に自信がある。	.67	.07	.04	-.02
SC 尊敬される人間になると思う。	.65	.09	-.19	-.10
SC 自分に自信を持っている。	.57	-.06	-.01	-.07
SC 自分の服装が好きである。	.49	.09	-.08	-.05
SC 何か課題が与えられた時、自分の取り組み方は正しい。	.49	-.02	-.05	.18
SC 自分を頼りないと思うことはない。	.44	-.07	-.33	.03
SC 自分の考え方・価値観は間違っていない。	.43	.01	-.11	.06
SC 成績に自信がある。	.41	.01	-.09	-.03
EA 自分が傷つくことが怖い。	-.03	.82	-.06	.09
EA 他人の反対が気になる。	-.06	.64	-.04	.13
EA 人から少しでもよく見られたいと思う。	-.02	.63	.09	-.02
EA うわさが気になる。	-.08	.63	-.19	.09
EA いつも人から好かれていたいと思う。	.14	.36	.27	.11
SR もっと人間的に成長したいと思う。	-.01	-.10	.80	.15
SR 今のままの自分ではいけないと思うことがある。	-.38	-.03	.62	-.01
SR 現在の自分では駄目だと思いつつ頑張ることがある。	.02	-.05	.51	.14
SR 自分の意見や能力を評価してもらいたいと思う。	.12	.30	.50	-.16
人になんか負けたくないと思う。	.25	.03	.27	-.20
SF 争いごとはいたくないと思う。	.03	.08	.02	.89
SF 人との間に波風をたてたくないと思う。	.04	.14	.18	.86

SC=自信, EA=評価懸念, SR=自己実現, SF=事なかれ主義

関係全般についてではなく、想起された一番仲の良い友人一人を類似性・非類似性を評定する対象としたのは、まず一つには(2)の質問項目との整合性を確保するためであり、二つ目には複数の友人を対象とした時に生じるであろう記述の不正確さの問題を回避するためである。

この群で測定されるのは、大学生の実際の友人関係における自己との類似性・非類似性の程度である。類似性・非類似性の対人認知における他者認知の段階を検討するのが目的となる。

分析のための操作

まず、(1)の結果について因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、12の

因子が抽出された。その中から、固有値が1以上で解釈可能な第4因子までを採用した。第1因子(信頼係数 = .87)は「周りからの自分に対する評判は良い」、「他の人から尊敬されるような人間になるだろう」、「自分に自信を持っている」、「自分の考え方・価値観は間違っていない」など12の自己肯定的な項目から構成されるため、これを対人関係における「自信」因子と名づけた。この因子を、自尊感情と類似性・非類似性の関連をみるための変数とした。一方、第2因子(= .77)は「人から少しでもよく見られたいと思う」、「いつも人から好かれていたいと思う」、「うわさが気になる」、「他人の反対が気になる」など5つの他者志向的で自己防

衡的な項目から構成されるため、これを「評価懸念」因子と名づけた。第3因子($r = .65$)は「もっと人間的に成長したいと思う」、「今のままの自分ではいけないと思うことがある」、「自分の意見や能力を評価してもらいたいと思う」など4つの向上志向的な項目から構成されるため、これを「自己実現」因子と名づけた(当初因子に組み込まれていた「人に負けたくないと思う」という項目については、寄与率が低かったためモデルから外した)。第4因子($r = .85$)は、「争いごとはしたくないと思う」、「人との間に波風を立てたくないと思う」の2項目からなる因子であり、「事なかれ主義」因子と名づけられた。各因子間の相関行列は下記のとおりである。

表2
自己概念因子間の相関行列

	自信	評価懸念	自己実現
評価懸念	-.07		
自己実現	.001	.439	
事なかれ主義	-.17	.131	.031

さらに、各因子について、因子内の項目の得点を足し合わせて因子合計得点を算出した。Kolmogorov-Smirnovの検定とShapiro-Wilkの検定の結果、各因子合計得点の分布の正規性が確認された。

また、(2)と(3)の質問項目における類似性の次元と非類似性の次元とを区別するために、オリジナルの5件法による評定をa)類似性b)非類似性を表すためのカテゴリカルデータに変換した。具体的には、各項目について「1」または「2」とマークしたケースを「非類似性」群、「4」または「5」とマークしたケースを「類似性」群と置き換えた。なお、「3」については暫定的に中立群と定めたが、

結果的に分析では使われなかった。さらに、被調査者ごとに現れた類似性・非類似性の数をそれぞれ合計し、これを理想・現実次元の類似性・非類似性得点と定めた。

結果と考察

結果1：類似性・非類似性の理想と現実

類似性・非類似性得点について理想・現実次元間の平均値の差の検定を行ったところ²⁾、類似性得点については両次元間に有意な差がみとめられなかった一方で、理想次元の非類似性得点の平均値が現実次元の非類似性得点の平均値よりも有意に低くなっていた($t(145) = -3.9$, $p < .01$)。この結果のみを解釈すると、理想次元よりも現実次元において非類似性が現れやすい、つまり現実の友人と自己との違いを見出しやすいという傾向が存在することになる。これは、接触の度合いによって友人と自分自身との間に存在する差異についての知覚が異なることを見出した下斗米(1990)の知見によって説明できる。下斗米が行った実験の結果によれば、友人選択において、あるいは付き合いの初期段階においては友人との表面的な類似性が知覚されるが、付き合いが深くなるにつれてより細かな差異が見出され、非類似性が知覚されるようになってゆく。本研究における現実次元の類似性は「今現在一番仲の良い」友人について評定されているため、付き合いの深さによって非類似性が際立つ結果になったと考えられる。

しかし、この結果について全体としてではなく17の項目別にみると、理想次元と現実次元のそれぞれについて類似性・非類似性が両方ともみられる(表3)ことに注意しなければならない。このことから、まず一つに少なくとも想

表3
理想×現実次元の類似性 - 非類似性 (χ^2 検定)

項目	理想			現実		
	TOTAL	男性	女性	TOTAL	男性	女性
1. 容姿	50.8** χ (D)	16.0** χ (D)	34.9** χ (D)	61.4** χ (D)	24.4** χ (D)	37.7** χ (D)
2. 服装	3.4 \dagger (D)	3.9 χ (D)		26.6** χ (D)	12.3** χ (D)	14.7** χ (D)
3. 体力				15.5** χ (D)	4.1 χ (D)	11.5** χ (D)
4. 趣味	31.3** χ (S)	12.3** χ (S)	19.0** χ (S)			
5. 成績		3.9 χ (D)		13.8** χ (D)	10.8** χ (D)	4.8 χ (D)
6. 経験	16.7** χ (D)	7.1** χ (D)	9.9** χ (D)	19.5** χ (D)	10.3** χ (D)	9.8** χ (D)
7. 性格		2.8 \dagger (D)			4.6 χ (D)	
8. 課題に対する取り組み方		2.8 \dagger (D)		12.2** χ (D)	8.0** χ (D)	5.6 χ (D)
9. 友人の多さ						
10. 雰囲気				8.1** χ (D)	8.8** χ (D)	
11. 興味の対象	31.8** χ (S)	8.1** χ (S)	23.8** χ (S)	10.8** χ (S)		12.8** χ (S)
12. 能力や特技	16.6** χ (D)	3.7 \dagger (D)	13.2** χ (D)	20.9** χ (D)	6.4 χ (D)	14.5** χ (D)
13. 考え方や価値観	7.7** χ (S)		9.1** χ (S)	9.0** χ (S)		14.1** χ (S)
14. 育った環境	8.3** χ (D)	12.6** χ (D)		20.5** χ (D)	19.6** χ (D)	5.9 χ (D)
15. 現在の幸福さ		4.6 χ (S)			8.2** χ (D)	
16. 将来の進路	19.6** χ (D)	8.0** χ (D)	11.8** χ (D)	16.4** χ (D)	7.4** χ (D)	9.2** χ (D)
17. 総合的			3.0 \dagger (S)		10.9** χ (D)	

注) $\dagger = p < .1$, * = $p < .05$, ** = $p < .01$, 空白 = non significant

S = 類似性, D = 非類似性

定類似性 (assumed similarity) のレベルで言うなら、平均値の差のみから「理想 (現実) 次元には類似性 (非類似性) が対応する」といったような一元的な関係を規定するのは早計であると考えられる。現実につき合っている友人とは接触度が大きいために全ての事柄について非類似性が際立ってしまう、全てにおいて似た友人を選んでしまう、理想の友人には全ての類似性が求められる、といったモデルは適当ではない。

二つ目に、各項目で類似性と非類似性の現れ方のパターンが異なるならば、それに対応する魅力判断次元の存在、もしくは魅力の重要度によるウエイトの差の存在が示唆される。理想と現実における類似性 - 非類似性の現れ方の違いは、理想の対人関係と現実の対人関係においてどのような魅力について類似性 - 非類似性が求められるのか (あるいは類似性 - 非類似性がど

のように知覚されるのか) というところに原因が求められるべきである。

項目別に詳しく見ていくと、理想次元と現実次元のどちらにも類似性が現れる項目がある。

例えば、「興味の対象」については理想次元

($\chi^2(1) = 31.8$, $p < .01$), 現実次元 (χ^2

(1) = 10.8, $p < .01$) の双方で類似性が有意に

現れた。一方で、理想次元と現実次元のどちら

にも非類似性が現れる項目も存在する。例えば、

「容姿」については、理想次元 ($\chi^2(1) = 50.8$,

$p < .01$) と現実次元 ($\chi^2(1) = 61.4$, $p < .01$)

の両方で非類似性が有意に現れた。ただし、二

つの次元で類似性と非類似性が一つずつ現れる

ケースは存在しなかったことには注意する必要

がある。この結果からは、ある特定の魅力判断

次元については、理想と現実の違いに関わらず

類似性と非類似性の基本的な方向性が存在する

ことが示唆されていると考えられる。例えば、「興味の対象」と「考え方や価値観」($t(1)=7.7, p < .01$; $t(1)=9.0, p < .01$)について二つの次元で類似性がみられるのは、パーソナリティにおける基本的志向性の類似性が交友関係において重要なウエイトを占めていることを表すと解釈できる。また、「容姿」

($t(1)=50.8, p < .01$; $t(1)=61.4, p < .01$)と「服装」($t(1)=3.4, p < .1$; $t(1)=26.6, p < .01$)の外見に関する特性については、二つの次元で非類似性が現れている。

しかし、想定類似性についての判断は当然ながら、他者認知のみから成り立っているものではない。魅力判断のプロセスを解明するためには、他者認知とともに対人認知におけるもう一つの側面である、自己認知のプロセスを考えなければならない。そのために、自己概念などの変数を含めてより詳しく検討していく必要がある。

結果2：自己概念の影響

自己概念についての各因子合計得点と理想 - 現実次元の類似性 - 非類似性得点との関係を調べると、「自信」因子合計得点は、理想 - 現実次元の類似性得点と弱い正の相関関係にあり($r = .172, p < .05$; $r = .254, p < .01$)、理想 - 現実次元の非類似性得点と弱い負の相関関係にある($r = -.290, p < .01$; $r = -.179, p < .05$)。この結果から、まず自信と類似性との関係について事前に立てた二つの予測のうち、自信と類似性とが比例するという前者の予測が支持される。自己の持つ特性を肯定的に捉える者は理想の友人にも同じものを求めるし、現実の友人についても自分自身との類似性をみとめる。

「評価懸念」因子合計得点は、理想次元の類

似性得点とのみ弱い正の相関関係にある($r = .183, p < .05$)。この結果は、Byrneらのイフエクタンス動機による類似性 - 魅力パラダイムの説明と一致する。他者からの評価を気にかける者は、類似性を欲求することで自己の特性に妥当性付与を行おうとするものと考えられる。「自己実現」因子合計得点は、どの次元の類似性 - 非類似性得点とも相関関係を持たない。「事なかれ主義」因子合計得点は、理想 - 現実次元の類似性得点と弱い正の相関関係にある($r = .181, p < .05$; $r = .200, p < .05$)が、非類似性得点とは相関関係を持たない。

項目別にみると(表4)、「自信」因子合計得点と両次元の類似性得点との間の正の相関は、魅力判断次元における態度(例えば「課題に対する取り組み方」)、性格特性(例えば「考え方や価値観」)、能力(例えば「体力」)、一般特性(例えば「現在の幸福さ」)の諸側面を全て網羅している。これに対して、「評価懸念」、「自己実現」因子合計得点は特にどの魅力判断次元とも関連を持たないが、「事なかれ主義」得点については、現実次元で「服装」($t(128) = -1.9, p < .1$)、「体力」($t(116) = -1.8, p < .1$)、「これまでの経験」($t(120) = -2.0, p < .05$)、「考え方や価値観」($t(118) = -2.3, p < .05$)、「育ってきた環境」($t(79.5) = -2.2, p < .05$)について類似性を持ち、理想次元で「雰囲気」($t(114.7) = -1.7, p < .1$)、「考え方や価値観」($t(122) = -1.8, p < .1$)、「育ってきた環境」($t(106) = -2.3, p < .05$)、「現在の幸福さ」($t(78) = -1.9, p < .1$)、「総合的」($t(105) = -2.7, p < .01$)に類似性を求める。この結果からは、「事なかれ主義」因子合計得点の高い者は、自分自身と近いアイデンティティを持つ者を友人として選択することで、なるべ

表4
自己概念×類似性 - 非類似性（t検定）

項目	理想				現実			
	SC	EA	SR	SF	SC	EA	SR	SF
1. 容姿								
2. 服装								- 1.9†(S)
3. 体力	- 2.8**(S)							- 1.8†(S)
4. 趣味		- 1.9†(D)			- 1.8†(S)		- 2.6*(S)	
5. 成績	- 2.0**(S)							
6. 経験								- 2.0*(S)
7. 性格	- 2.7**(S)							
8. 課題に対する取り組み方	- 3.0**(S)				- 2.7**(S)	2.3*(D)		
9. 友人の多さ					- 2.6**(S)			
10. 雰囲気	- 1.7†(S)			- 1.7†(S)				
11. 興味の対象					- 2.5**(S)			
12. 能力や特技	- 2.1*(S)							
13. 考え方や価値観	- 2.2*(S)			- 1.8†(S)	- 1.8†(S)			- 2.3*(S)
14. 育った環境		- 1.9†(S)		- 2.3*(S)	- 1.7†(S)			- 2.1*(S)
15. 現在の幸福さ	- 2.3*(S)			- 1.9†(S)				
16. 将来の進路								
17. 総合的				- 2.7**(S)	- 2.3*(S)			

注) † = $p < .1$, * = $p < .05$, ** = $p < .01$, 空白 = non significant

S = 類似性, D = 非類似性, SC = 自信, EA = 評価懸念, SR = 自己実現, SF = 事なかれ主義

く交友関係に摩擦が生じることを避けることを志向しているとの解釈が成り立つ。対人関係における相互行為の相手が自分と近いアイデンティティを持つ者であればあるほど、行動の予期も確実になるからである。

自己概念と類似性 - 非類似性についてのこれらの結果はまた、全体として態度や対人魅力と感情価 (affective value) との間に相関関係を想定したAjzen (1974) のモデルを支持するものと思われる。Ajzenは類似性についての知覚が直接的に対人魅力を増加させるというモデルを批判し、類似性を持つ属性についての主観的な感情価を説明要因として設定した。このモデルにおいては、ある人物が他の人物に対してとる態度は「特定の属性についての主観的感情価」×「知覚対象がその属性を持つことについての主観的確率」を属性の数だけ足し合わせた

ものとして規定される。つまりAjzenのモデルでは、魅力判断次元間での重要度の差異を社会的望ましさなどの画一に定められる要因にではなく、個々人で異なる主観的感情価に求める。

類似性 - 非類似性を認知するプロセスにおいては、まず自分自身の持つ属性についての認知が行われなければならない。その過程で、各属性には感情価が付与される。そのうえで、現実の友人についての類似性 - 非類似性の認知が行われ、理想の友人については類似性 - 非類似性が欲求される。よって、類似性 - 非類似性を認知し欲求するプロセスは、常に自己認知と相互反映的である。本研究では現実の友人についての態度 (好意度) の評定が行われていないため、現実の友人について評定された類似性 - 非類似性が欲求を含んだものなのか、それともただ単に認知されただけのものなのか、それ以外の要

因が介在するのか、ということが区別されない。それゆえ、評定された現実の友人との類似性 - 非類似性について感情価との関係を検証するのは困難である。しかし、そのことを割り引いて考えても、「自信」と「事なかれ主義」因子合計得点と両次元の類似性 - 非類似性との間にみられた一貫した結果は、自己概念と感情価との関係を例証するものであると思われる。すなわち、自分に自信のある者は自己と類似した特性そのものに正の感情価を与え、類似性を欲求する。事なかれ主義的な性格を持つ者は、価値観や育ってきた環境など自己のアイデンティティを示す項目に正の感情価を与え、そのような項目について類似性を欲求する。

結果3：性別の影響

表3を概観すると、理想次元、現実次元とも

に、男性には非類似性が現れる項目が多く、女性には類似性が現れる項目が多いことがみてとれる。実際に両者間で平均値の差の検定を行うと、非類似性得点については男性の方が高く ($t(160)=2.18, p < .05$)、類似性得点については女性の方が高い ($t(161)=2.15, p < .05$) ことが確認された³⁾。本研究においては男女の構成比が均等でなく、女性の被調査者の方が多くなっているため(およそ男性1:女性2)、全体的な類似性 - 非類似性についての傾向が、このことによって歪められていることも考えられる。ただし、類似性 - 非類似性ともにこの傾向がみられるのは現実次元のみであり、理想次元においては男女差は確認されなかった。実際に男女間で各項目についての類似性 - 非類似性の出現率の差を比較すると(表5)、理想次元においては男女差は確認されなかった。実際に男女間で各項目についての類似性 - 非類似性の出現率の差を比較すると(表5)、理想次元においては男女差は確認されなかった。

表5
性別 × 類似性 - 非類似性 (χ^2 検定)

項目	理想				現実			
	χ^2	p	男性	女性	χ^2	p	男性	女性
1. 容姿	0.1	n.s.			1.2	n.s.		
2. 服装	1.4	n.s.			0.6	n.s.		
3. 体力	0.1	n.s.			0.1	n.s.		
4. 趣味	0.1	n.s.			0.1	n.s.		
5. 成績	3.4	†		D	2.0	n.s.		
6. 経験	0.3	n.s.			0.6	n.s.		
7. 性格	0.9	n.s.			3.2	†		D
8. 課題に対する取り組み方	1.8	n.s.			1.6	n.s.		
9. 友人の多さ	0.0	n.s.			1.6	n.s.		
10. 雰囲気	2.9	n.s.			2.8	†		D
11. 興味の対象	0.2	n.s.			2.6	n.s.		
12. 能力や特技	0.2	n.s.			0.0	n.s.		
13. 考え方や価値観	1.8	n.s.			5.5	*		S
14. 育った環境	5.8	*		D	6.0	*	D	D
15. 現在の幸福さ	2.1	n.s.			9.7	**	D	
16. 将来の進路	0.3	n.s.			0.3	n.s.		
17. 総合的	3.9	*			12.2	**	D	

注) † = $p < .1$, * = $p < .05$, ** = $p < .01$, 空白 = non significant

S = 類似性, D = 非類似性

たのは「成績」($F(1)=3.4, p < .1$), 「育った環境」($F(1)=5.8, p < .05$), 「総合的」($F(1)=3.9, p < .05$)の3項目のみである。一方で、現実次元については、非類似性得点は男性の方が高く($t(157)=2.8, p < .01$), 類似性得点は女性の方が高い($t(150)=-1.9, p < .1$)傾向がある。友人との交友スタイルには性差が存在し、女性の方が男性よりも対人関係における同調性を重視するというのは対人心理学において古くから確認されてきた知見であり、この結果は性差による交友スタイルの違いから解釈できるものと考えられる。

また、どのような類似性が求められるかということについても性差が存在するといわれ、先行研究をレビューした結果としてWinstead (1986)は、同姓同士の友人関係において女性には価値観の類似性が、男性には興味の対象の類似性が重要になると報告した。この点について我々のデータをみると、まず「考え方や価値観」の項目について、女性は理想と現実の両次元において類似性が有意であり($F(1)=9.1, p < .01$; $F(1)=14.1, p < .01$), 男性は有意差がみられない。「興味の対象」の項目については、こちらでも女性が理想と現実の両次元で類似性が有意であった($F(1)=23.8, p < .01$; $F(1)=12.8, p < .01$)一方で、男性は理想次元のみ類似性が有意だった($F(1)=8.1, p < .01$)。「考え方や価値観」, 「興味の対象」ともに類似性はみられたが、女性は価値観, 男性は興味の対象, というWinsteadの主張通りの結果は出なかった。この理由としては、まず、Winsteadの場合は同姓同士の友人関係を想定していたが、本研究においては「今一番仲の良い友人」について同姓間, 異性間の区別を設けずに評定が行われたため、異性間の友人関係に

特有の類似性 - 非類似性の効果が混同されているであろうことが挙げられる。また、異性間の友人関係を含むということは当然、単純な友人関係のみではなく恋愛関係までもを対象として含んでしまうことも意味する。先述のように、Winchに端を発する欲求の相補性仮説においては、主に結婚相手の選択といった場面において異性間の支配的・服従的な特性が相補的に働くことが報告されている。異性間の場合には特定項目の類似性 - 非類似性が欲求されることは十分に考えられることであり、項目別にみた時にこの問題は無視できないものと思われる。

しかし、類似性 - 非類似性の現れ方に性差が存在するとしても、理想次元に男女差が現れないことからわかるように、類似性 - 魅力パラダイムのより広範な知見を性差に還元するのは適当ではないと思われる。むしろ性別は、自己概念などの他の要因と関連付けて考察されるべきである。例えば、男性 - 女性間で自己概念を構成する4因子の各因子合計得点の平均値の差をみると、「自信」以外の「評価懸念」($t(163)=-2.4, p < .05$), 「自己実現」($t(165)=-2.2, p < .05$), 「事なかれ主義」($t(164)=-2.5, p < .05$)の3因子合計得点で女性の方が男性よりも有意に高くなっている。つまり、男女の自己概念には質的に異なる部分が存在する。「評価懸念」・「事なかれ主義」因子合計得点と類似性 - 非類似性との関係については先述のとおりであり、このことから性差は類似性 - 非類似性を欲求するメカニズムに直接的な影響を与えるものではないとしても、自己認知などの関連において間接的な要因として捉えられるべきであるといえる。ただし、本研究の結果からは、これらの変数間の関係を特定することは難しい。同姓間の友人, 異性間の友人, 恋愛

関係の3つを区別するような操作を行う必要がある。

また、現実の友人関係に満足しているとしていないとに関わらず、理想の友人についての類似性 - 非類似性の欲求は、現実の友人との類似性 - 非類似性を知覚したうえで形成されるものと考えられる。その意味で、現実次元における類似性 - 非類似性に現れた性差もまた、類似性 - 非類似性の欲求に間接的な影響を与えるものといえるだろう。

まとめ

本研究は、想定類似性 - 非類似性についての対人認知と欲求との関係を調査するという目的の下に行われた。そのため、(1) 自己概念、(2) 理想の友人との類似性 - 非類似性、(3) 現実の友人との類似性 - 非類似性、を測定する質問紙を作成し、(1) で自己認知、(2) で理想の類似性 - 非類似性についての欲求、(3) で現実の類似性 - 非類似性についての他者認知、を検討した。

その結果、まず類似性得点と非類似性得点の現れ方の理想 - 現実次元における比較から、理想次元よりも現実次元において非類似性が現れやすいことが明らかになった。これは、現実の友人を対象とした場合、付き合いの深さによって細かな差異が知覚されやすいことによるものと考えられる。ただし、現実次元の想定類似性 - 非類似性については、欲求と現実についての認知とを区別しにくいことが問題点として挙げられる。例えば、現実の友人関係についての満足度を含めて調査を行ったならば、上記の結果については、理想と違って現実的には非類似な他者と付き合いをざるを得ないといったかたち

での解釈が行われていたかもしれない。

類似性 - 非類似性の現れ方を項目別にみみると、魅力判断次元によって特定のパターンが存在することが示唆された。例えば、「興味の対象」と「考え方や価値観」のパーソナリティにおける基本的志向性の次元については、理想と現実の両次元において類似性が有意に現れた。このことから、パーソナリティにおける基本的志向性の類似は重要性効果が高く、友人選択の場面で重要視されるのみならず、友人関係を維持するための機能を持つと考えられる。

次に、類似性 - 非類似性についての対人認知における自己認知の側面を検討すると、どのような自己概念を持っているのかということと類似性 - 非類似性の認知 / 欲求との間に関連性が認められた。例えば、自分に自信を持つ者は、態度、能力、性格特性、一般特性などの諸側面について広く理想の友人に類似性を求め、現実の友人に類似性を知覚する傾向にある。つまり、自信は魅力判断次元の違いに関わらず作用する頑強な因子であるといえる。また、自分を事なかれ主義的な性格の人間だと認識する者は、理想の友人と現実の友人に、育った環境や価値観などの自己のアイデンティティを形成する属性と近いものを認知 / 欲求する。つまり、類似性 - 非類似性を認知 / 欲求するプロセスとは、自己認知と他者認知との相互反映的な関係の中で特定の属性に主観的感情価を付与し、その感情価に影響されるかたちで類似性を認知し、欲求するというものである。

ところで、以上のような対人認知と人付き合いとの関係を考えるときには、性差を説明要因として除外することはできないだろう。我々のデータについて性別と類似性 - 非類似性との関係をみると、現実次元において男性には非類似

性が、女性には類似性が現れる場合が多い。この結果は、女性は男性よりも周囲との同調性を重視するという性差による交友スタイルの違いから解釈できる。しかし、理想次元については男性と女性の間で有意な差はみられないことから、類似性 - 魅力パラダイムそのものに性差を組み入れるのは適当ではないと思われる。一方で、自己概念と性別との関係を見ると、「評価懸念」・「自己実現」・「事なかれ主義」の3因子合計得点について女性の方が高くなる傾向がみられた。性差は類似性 - 非類似性の欲求と直接的な関係を持たないとしても、自己認知等を経由して間接的に影響を与える変数であるといえる。しかし、本研究の問題点としては、類似性 - 非類似性を評定する対象を性別の組み合わせによって限定しなかったために、同姓間の友人・異性間の友人・恋愛関係の3つについて区別できないことが挙げられる。この点は今後の研究における課題になるだろう。

展 望

本稿では、理想の友人関係と現実のそれとを区別し検証を行うことによって、類似性 - 魅力パラダイムの下で検証されてきた性格特性・態度（意見）・能力・一般特性などについての類似性 - 非類似性の欲求が、対人認知における自己認知と他者認知との過程で形成されるという観点を示した。ただし、現実の友人についての類似性 - 非類似性の認知と欲求との次元が区別されていなかったため、その詳細が十分に明らかにされたとは言いがたい。現実の友人についての満足度を評定する項目を設けるなどして、この点を明確にしていく必要がある。また、今後の展開としては、この対人認知の社会性を考

慮に入れることが重要になるであろう。自分と他者とが似ているのかどうか、またどのような点においてどのくらい似ればいいのかということについての認知や判断は、すぐれて社会的に構築されるものであるとすることができる。しかし、逆に言えば類似性 - 非類似性の認知はまた、それが社会的なものであるがゆえに、当該集団にどの程度コミットしているのかということについての判断そのものに作用しうる。

例えば、今回の調査を友人集団内で行えば、内集団成員同士が互いについての類似性 - 非類似性の認知をどの程度共有しているのかを評定することができるし、逆に回答者がどの程度その友人集団にコミットしているのかということの評定することができる。さらに、感情価と集団規範、社会的望ましさの効果を比較するような実験をデザインすることも可能になるだろう。類似性 - 非類似性認知と欲求の問題は、対人認知と認知の社会性との関係を探るうえで重要なテーマになるだろう。

注

- 1) データの収集と入力に関して、私立R大学学部生（当時）の奥野悦子、木原由衣、小西麻貴子、藤井道代、西尾えりかさんの協力を得た。
- 2) 理想 - 現実次元の類似性 - 非類似性得点のそれぞれについて、分布の正規性が確認されている。
- 3) 理想次元 - 現実次元を併せた類似性 - 非類似性得点について、分布の正規性が確認されている。

本研究の一部は、The 24th International Congress of Psychology (ICP2004) in Beijingで発表された。なお、本研究は、2003年度産業社会学会プロジェクト研究助成費を用いて行われたものである。

引用文献

- Ajzen, I. 1974 Effects of Information on Interpersonal Attraction: Similarity versus Affective Value.

- Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 374-380.
- 蘭千寿 1986 対人魅力 - 自尊感情と好意 . 対人行動学研究会 (編) 対人行動の心理学 誠信書房 147-153.
- 蘭千寿・小窪輝吉 1978 魅力形成に及ぼす社会的望ましさの効果 . 実験社会心理学研究 , 18 , 75-81.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. New York: academic Press.
- Byrne, D., & Nelson, D. 1965 Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- Festinger, L. and Back, K. 1950 *Social pressures in informal groups: A study of a housing community*. Harper.
- 今川民雄・岩淵次郎 1981 対人認知過程の構造について 好意的 2 人関係の因子分析的研究. 実験社会心理学研究 , 21 , 41-51.
- Insko, C.A., Nacoste, R.W., & Moe, J.L. 1983 Blief congruence and racial discrimination: Review of the evidence and critical evaluation. *European Journal of Social Psychology*, 13, 153-174.
- Kaplan, M.F. & Anderson, N.H. 1973 Information integration theory and reinforcement theory as approaches to interpersonal attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 28, 301-312.
- Kiesler, S.B. & Baral, R.L. 1970 The search for a romantic partner: The effect of self-esteem and physical attractiveness on romantic behavior. In K.J. Gergen & D.Marlowe (Eds.), *Personality and Social behavior*. Addison-Wesley. Reading , 155-165.
- McLaughlin, B. 1970 Similarity, recall, and appraisal of others. *Journal of Personality*, 38, 106-116.
- Myers, D.G. 1987 *Social Psychology 2nd ed.*, McGraw-Hill.
- Newcomb, T.M. 1961 *The acquaintanceship process*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- 奥田秀宇 1989 二者関係の発達 . 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (編) 社会心理学パースペクティブ 1 個人から他者へ 誠信書房 333-360.
- 奥田秀宇 2000 対人魅力における重要性効果 - 被験者間および被験者内計画による検討 - 実験社会心理学研究 , 39 , 114 - 120.
- Rokeach, M. 1968 *Beliefs, attitudes and values*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Seyfreid, B.A. 1977 Complementarity in interpersonal attraction. In S. Duck (Ed.) *Theory and practice in interpersonal attraction*. Academic Press , 165-184.
- 下斗米淳 1991 対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化 . 学習院大学文学部研究年報 , 37 , 269-287.
- Stalling, R. S. 1970 Personlity similarity and evaluative meaning as conditioners of attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14, 77-82.
- Tesser, A. 1969 Trait similarity and trait evaluation as correlates of attraction. *Psychonomic Science*, 15, 319-320.
- Wagner, R. V. 1975 Complementary needs role expectations, interpersonal attraction, and the stability of working relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 116-124.
- Walster, E. 1970 The effect of self-esteem on liking for dates of various social desirabilities. *Journal of Experimental Social Psychology*, 6, 248.
- Walster, E., Aronson, V., Abrahams, D., and Rottman, L. 1966 Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 508-516.
- Wetzel, C.G. & Insko, C.A. 1982 The similarity-attraction relationship: Is there an ideal one? *Journal of Experimental Social Psychology*, 18, 253-276.
- Winch, R.F. 1958 *Mate selections: A study of complementary needs*. New York: Harper.
- Winstead, B.A. 1986 Sex differences in same-sex friendships. In V.J.Derlega & B.A.Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag, 81-99.

Similarity/Dissimilarity in Interpersonal Cognition

MONDEN Kotaro *

HIRAMOTO Takeshi **

Abstract: The concept of “similarity” means the degree of resemblance between one’s appearance, attitude, ability, and character etc. and that of another person. Many preceding researches dealing with similarity report that interpersonal attraction increases proportionately with similarity to the object person. On the other hand, some researches report that dissimilarity works complementarily in interpersonal relationships. The effects of similarity/dissimilarity are not the same on all dimensions of interpersonal cognition, but they are different according to the comparative social desirability and importance of particular items. We think the differences are derived from the process of both self-cognition and interpersonal-cognition. The questionnaire is designed to reveal what kinds of variables are crucial to that hypothesis. It consists of three groups which measure (1) self-concept, (2) similarity/dissimilarity in ideal friendship, and (3) similarity/dissimilarity in real friendship. Reciprocal process between self-cognition and interpersonal-cognition evaluated by (1) and (3) is interpreted to differentiate importance of the items and affective value for others and to lead to ideal similarity/dissimilarity. The results are considered to show that the importance of basic orientation in one’s personality and stable self-confidence have relationship with cognition and desire for similarity and also have effects on interpersonal cognition.

Keywords: interpersonal cognition, similarity, dissimilarity, complementarity

* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University

* * Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University